

聖句

宗祖は人中の弥陀なり。

宗祖の人格を愛する処より

宗旨をも愛するに至る。

山崎弁栄『宗祖の皮髓』

# 生 眞

第 78 卷 476 号

<http://canchiin.net>

1・4・7・10月15日発行

【発行所】

眞生同盟本部  
〒105-0011  
東京都港区芝公園  
2-2-13 観智院

【振替】

00160-6-80674

【電話】

03 (3431) 1450

【Email】

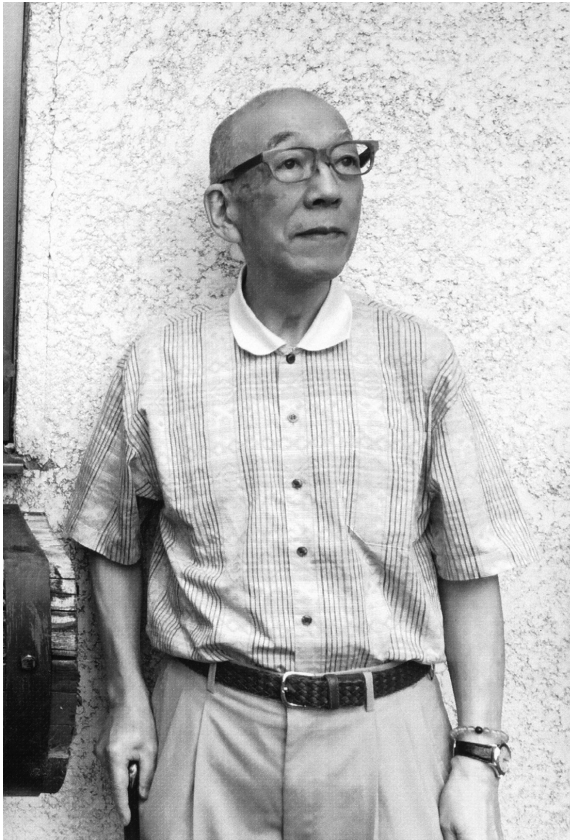
shinsei@canchiin.net

【編集兼発行人】

土屋正道

会費 年額 2,000円

一部 100円



観智院 第二十二世・名誉住職 眞生同盟 二代主幹 多聞院 第三世  
浄土宗 正僧正・正司教・講師 総本山知恩院 長老 大本山増上寺教監・院家

智徳心院青蓮社紅譽念阿華開見佛光道大和尚 三回忌追悼会  
令和元年六月二十三日 十七時三十分  
於 ホテルオークラ東京 オーチヤードルーム

御導師 大本山増上寺八十八世法王 八木季生 大僧正台下

式衆 石田孝信上人 (青森・楽宝寺)

古田幸隆上人 (長野・法学寺)

金田昭教上人 (千葉・浄土寺)

## 式次第

一、念仏一会

一、献花

一、御導師入堂

一、回向

一、十念

一、開式の辞

一、授与十念

一、御垂示

大本山増上寺八十八世法王

八木季生大僧正台下

一、法話

石田 孝信上人

(楽宝寺 三回忌法要導師)

一、ご挨拶

友田 達祐上人

(大本山増上寺執事長)

金田 進徳上人

(大本山増上寺顧問)

一、献杯

佐藤 雅彦上人

(東京教区教化団長)

一、お話

佐藤 孝雄上人

(慶應大学教授・高德院)

古田 幸隆上人

(眞生同盟常務理事 法学寺)

新谷 仁海上人

(法類・功德林寺)

一、謝辞

谷口 英夫様

(檀信徒総代)

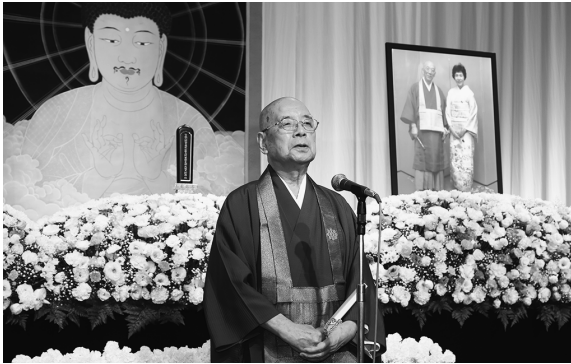
小林 正道上人

(法類総代・妙定院)

土屋 正道

(観智院・多聞院住職)

(眞生同盟主幹)



八木台下御垂示



追悼会祭壇



献杯

光道上人三回忌追悼会謝辞

土屋 正道

本日、光道上人三回忌追悼会にあたり、お導師をお勤め賜りました大本山増上寺法主八木季生大僧正台下、誠にありがとうございました。御法詣を賜りました眞生同盟顧問 石田孝信上人、ご挨拶を賜りました、増上寺執事長 友田達祐上人、増上寺顧問金田進徳上人、東京教区教化団長 佐藤雅彦上人、お念仏を悦ぶご体験、光道

上人の思い出をお話しくださいました、佐藤孝雄上人、新谷仁海上人、古田幸隆上人、暖かく貴重なお言葉をありがとうございます。その他、浄土宗役員、宗議会の方々、東京教区役職、増上寺役職、芝山内寺院の諸上人はじめ檀信徒・眞生同盟会員の皆様に全国より大勢ご参列いただきました。心より感謝申し上げます。

本日の三回忌、増上寺三階道場



住職謝辞

を拝借し別時念仏会・法要を厳修いたしました。徒弟と有志の少数の別時念仏会と思っておりますが、伊藤唯真猥下にお花をお供え賜り、多くの方々がご参列下さいました。光道上人の念仏求道、教化実践の時物と喜んでおります。

三回忌の記念に『随喜賛嘆録―善き人との邂逅―』を仏前に奉呈いたしました。昨年より原稿を依頼いたしましたところ、八木台下、阿川台下、柴田台下、真野大僧正はじめ五十六名の方々より玉章を賜りました。誠にありがとうございます。念仏を悦び、ご縁を広げる一助となりましたら師父光道上人もきつと随喜賛嘆してくださいと信じます。こちらの写真を表紙に使いました。晩年、父はじつと遠くを見つめる眼差しをするところがありました。仏様を仰いでいたのか、来し方を振り返っていたのかはわかりませんが、父は「死ぬまで元氣、死んでも元氣」と



檀信徒総代 谷口英夫様



眞生同盟常務理事 古田幸隆上人

言っておりますから、今この瞬間もこの眼差しで私たちを見守っているに違いないと感じています。今年四月は母悦子の十三回忌でした。相変わらず仲がいいな、と感心します。きつと極楽でも仲良くやっているに違いありません。そんな両親に育まれた私はふと気がつく昭和を三十年、平成を三十年生かしていただき今年還暦を迎えました。我ながら驚いてしまいますが、生まれ変わった気持ちで念仏申してまいります。今年もDVD二枚組を記念品といたしました。祖父観道上人の法語集『大悲に生きる』をデジタル化したものと、光道法話『光の道を伝える』として晩年のビデオ映像、録音などを収めたものに、新たに祖父観道上人、中野善英上人の肉声を収めました。高声念仏や大念仏、また弁栄上人の思い出など五十年以上前の先師の言葉を聞いていただければ幸甚です。

ご案内の通り、本年は浄土宗七

祖聖阿上人六〇〇回忌、増上寺中興観智国師存心上人四〇〇回忌、そして祖父観道上人の師匠山崎弁栄上人一〇〇回忌にあたります。十月三日に聖阿上人法要、十月十六日に観智国師法要が大本山増上寺にて営まれます。この騎縁に十月十一日から二十日の十日間、十日十夜の念仏会をいたします。お手元のパンフレットにお目通し下さりぜひお越しくださいませ。念仏の合間に、毎日、歌、演奏、講演、ダンス、落語などの方々をお招きいたします。一人でも多くの方々にご縁が結ばれますよう念仏精進して参る所存です。今後ともご教導ご鞭達をよろしく願ひいたします。

最後になりますが、檀信徒・眞生同盟会員皆様のご支援はもとより、法類、親族・家族、徒弟の皆さんのお支えに厚く感謝申し上げます。本日は、まことにありがとうございます。

十念





三回忌法要祭壇

紅譽光道上人 三回忌法要

令和元年六月二十三日 十五時  
於 大本山増上寺 三階道場

導師

石田 孝信上人(青森・楽宝寺)

式衆

古田 幸隆上人(長野・法学寺)

金田 昭教上人(千葉・浄土寺)

諸澤 正俊 (観智院徒弟)

酒井 正空 (観智院徒弟)

司式

新谷仁海上人(東京功德林寺)

式次第

- 一、別時念仏会
- 一、開式

『眞生礼拝儀』

- 一、三礼
- 一、至心に帰命す
- 一、表白

- 一、如來光明歎徳章

- 一、至心に勧請す

- 一、光明摂取の文

- 一、念仏三昧

- 一、別回向

- 一、総回向の文

- 一、至心に発願す

- 一、檀信徒総代挨拶

- 一、眞生同盟理事挨拶

- 一、住職・主幹謝辞

- 一、住職 加澤 昌人様

- 一、住職 土屋 正道

土屋 正道



導師 眞生同盟顧問 石田孝信上人法話



法要の様子



眞生同盟理事 加澤昌人様



壇信徒総代 武井孝晴様



# 『心のふるさと』

(昭和三十一年二月発行)

土屋 観道 上人(眞生同盟初代主幹)

(475号より)

## 第二章 宗教の目的

### 一、宗教の世界

然らば宗教の世界とはどんな所でありましょう。これは説く人によつて、多少の相違はありますが、有限の世界より無限の世界に生きる所であります。人はいかに偉くとも、またいかに永く生きるとも、多くは有限なるものであります。従つて、無限の力に依らざれば人は真に生きることが出来ぬのであります。

どんな偉い人と云つても、自分一人で生きることが出来ないのです。必ず天地の力に待たされれば、一刻の生命もこれを維持することは出来ぬのです。それに人はどんなに長生きしても百才、二百才と生きるものではありません。必

ず人は一度は死ななければならぬのであります。この死の前に立つて誰か反抗し得るものがありませ

しょう。そこに至ると宇宙は実に絶大なるものであります。実に宇宙の悠久にして宏大なることよ、宇宙は時間空間に渡つて、実に宏大無辺なるものであります。この宇宙と人生に於て、誰か宇宙の偉大なるものを感じざるものがありま

す。そして吾々は宇宙の中に存在し、宇宙の中に生長しつつあるのであるが、この宇宙を離れて、果して吾々が有り得るであろうか、吾々はかくして宇宙と人生とのことを考えざるを得ないのであります。かくして、吾々の考えは遂に宇宙の問題にはいる。宗教とは宇宙生命に帰る人生の運動なりと申し

てもよいのであります。而して宗教の世界とはこの宇宙生命の世界であります。宇宙は一大霊体である。吾等に意識ある如く、宇宙にも一大意識があります。万有は宇宙の分身であり、宇宙の生命を宿すが故に、万有の研究はまた宇宙の研究にも当るのであります。

吾々が永遠の生命を要求し、無限の向上を求めて止まぬのは要するにこの宙の永遠にして、無限に向上して止まざるが故であります。何となれば吾等は宇宙の分身なるが故に吾々の根本要求はその根底において、宇宙の要求と同一であるからであります。

### 二、宇宙と人生

さらにこの事を明らかにするには宇宙と人生との関係を明らかにすることが大切であります。宇宙と人生との関係はすでに述べたところであるがその中でも宇宙と自己とが一体不二であるということを知ることが何かと非常に大切であります。

吾々の信ずるところによればこの大宇宙は実に一大生命体である。時間的にも空間的にも廣大無辺にして宇宙一体であります。

しかもこの大宇宙には無限の力が充ち満ちております。この力によつて一切の万有は産み出され、成育し発育し、発展しつつあるのであります。否宇宙の万有はこの宇宙生命の力の現れといつてよいものであります。しかも万有は宇宙の分身であります。宇宙と万有とは不二であります。

宇宙は差別的にいえば万有、全体的にいえば宇宙であります。

故に宇宙と万有とは決して二つのものではない。だから万有の一人の吾々にも宇宙との関係は不二であります。吾々は宇宙の分身であり、宇宙の生命を宿す宇宙と別なものではありません。否それどころか、吾々は宇宙の力と法則と恵みとに養われているのであります。

### 三、菩提と涅槃

仏教の教えるところによれば仏

教の目的は菩提と涅槃とにある。「覚」とはサトリと読む、宇宙の真理を覚ることであります。宇宙の真理を覚つた人を覚者という。覚者とは印度語では仏陀と云います。

然らば真理とは何であろうか、仏教ではこれを後世之法印と云つて、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜と申しております。

ある仏教学者はこの他に「一切は苦なり」という真理があると云っている人もあります。

涅槃とは寂滅である。煩惱の寂滅であります。

そこは宇宙本仏の光明土であります。常恒の平和、争いなき天地それこそ常樂の世界であります。

然るに凡夫はこの世の理を知らず、この世に常樂我淨を求めますが故にこの世に執着を持つのであります。

無常無我のこの世に常劫の樂しみがあるはずもなく、それは反つて苦しみの種となります。さらに凡夫は諸法の無我なるを知ら

ず、常に我あり、彼あり、と思うが故に、我他彼此の見解を脱することができず、一切を私利と私欲の打算生活に終わるのであります。したがつてそこに相互の争いが絶えず、弱肉強食、生存競争の生活が止まぬのであります。

もし宇宙が一体であり万有が宇宙生命の現れであるならば、万有と宇宙とは不二であります。故に覚者の心には諸行(万有)の無常なるは宇宙大生命の発展とも見え、諸法無我なるは宇宙の外に我なきことを知るのであります。この心を菩提心という。菩提心とは宇宙の大生命に帰依する心であります。涅槃に入るとは本仏光明の世界に入ることであります。

#### 四、往生と成仏

そして往生といえはこの大涅槃界に入ることであります。往生は即ち成仏である。それはあたかも菩提と涅槃とのようなものである。仏の世界を淨土という。仏の淨土とは即ち涅槃界であります。故

に淨土に往生するということは涅槃界に入ることであります。然るに淨土に往生すれば諸仏と等しく吾々もサトリを開いて仏となるが故に往生と成仏とはまた同じことなるのであります。(続)

## 二河白道 (二)

『ラジオ放送「浄土宗の時間」放送法話

—善導大師さまから法然上人へ— 昭和55年3月14日

土屋 光道 上人(眞生同盟二代主幹)

(475号より)

貧乏や圧政といった外敵からのがれても、水の河にたとえられる「むさぼり」と、火の河にたとえられる「いかり」という恐しい敵が人間だれしもの心の中にあつて、その外敵ならぬ内なる敵に、内部から正氣を失わさせられ、平和と幸福とを破壊させられている。そうしたありのままの人生の真相を教えられました。

人間誰しも、欲がなくては生きては行けません、それが一度齒止めを失うと果てしがありません。お釈迦様はこの欲望の恐ろしさを繰り返し警告されました。

「たとえ雪山ヒマラヤを化して黄金となし、更にこれを二倍にすると、よく一人の欲を満たすに足らぬ」と仰せられ、また「たとえば、乾草の炬火たいまつを背負つて、風に向つて行くが如く、やがてわが身を亡ぼす」とも警告されています。

昔から語伝えるお伽話の「舌切り雀」や「花咲爺さん」や「猿蟹合戦」などもみな欲深をいましめる寓話で、そこに親が子に教える欲に関わる人生訓がこめられていました。ところが最近はこのお伽話でも影が薄くなって、それこそ人を押しつけても利潤を追求するガメツイ人間、相手構わぬ我利

我利亡者が沢山登場しています。欲しいものは何でもわがものにする人達。今日程、物質や金銭に恵まれないが、なおその上というむさぼりの心は、丁度、一度せきを切つて溢れ出した大河の洪水が、

どんどんと田畑や家屋を浸害してあくことを知らぬ姿に似て、一億総てが餓鬼道に陥つてしまった感があります。エコノミックアニマル化した上は総理大臣から下は集団万引の幼稚園「児まで人をおしのけ名利愛欲に走つて、このままでは個人ならず、国家・民族すら

亡びてしまひそうです。げに歯止めを失つた欲望、道理にはずれた貧りの心ほど恐ろしいものはありません。

古歌に

欲深き人の心と降る雪は

積るにつけて道見えぬなりとありますが、欲で道理がみえなくなつてしまつた今日、正しい人生観、真正の宗教によつて、このむさぼりの欲心を調御し、道理が

発見されなければなりません。さて、もう一つのだれしもが持つ内なる敵は、炎々たる焰に比せられる「いかり」の心であります。

同じくお釈迦様は、「いかりにかり立てられ、人は悪しき処におもむく」。口をきわめ言葉を尽くしてこの「いかり」の恐ろしさを説き、その調御を勧められます。「田畑は雑草によつて損われる如く、この世の人々は瞋りによつて損われる」と。現代はまた、この

いかりに侵されています。一人一人の心の中に、そして世界の国と国、民族と民族との間に、果してもない、いかりの火が燃えていることは昔の比ではありません。一本のマッチが大火のものになるように、いつどこから大きな戦争になるか、今ほど平和が、個人に家庭に社会に全世界に求められている時はありません。

昔は、腹が立っても胸をなで下して勘忍したのが、今は、アタマに来た、トサカに来たというように、自分の思い通りにならぬとすぐカツとして喧嘩になる。ガソリンのようにならぬ火が付き、いつ爆発するかわからぬ時限爆弾をかかえているような状態です。お釈迦様が

「雑言と悪語とを語つて、愚かなる者は勝てりと言ふ。されど、まことの勝利は、勘忍を知る人のものである。忿るものに忿りかえすは、悪しきことと知るがよい。忿るものに忿りかえさぬ者は、二つの勝利を得るのである。他人のいかれるを知つて、正念におのれを静める人は、よくおのれに勝つとともに、また他人に勝つのである」と仰せられるように。我々は外敵に勝つとともに、わが内なる敵である水と火とに譬えられるむさぼりといかりとに打勝つて進まなければなりません。その時に本当の幸福と平和の世界が到来するのであります。この内心の敵に打勝つ

教え、そこに仏教があるのです。その意味で、今ほど個人は勿論、世界のために真実の宗教が切実に求められる時はありません。しかしながら、理窟ではわかつて、実際にこの内なるむさぼりといかりの敵を克服して真実の白道を踏み進むことは至難なことです。そこに自分の力の弱さ、人間の力だけではどうしても助からぬ無力を感じます。そこに更に大きなみ仏のお力が授かることを、善導大師は「二河白道」のお話しの後半に説いて下さるのです。

道詠

阿弥陀仏を

南無阿弥陀仏で

求むれば

南無阿弥陀仏が

アミダなりけり

中野善英



# 生活を拝む (『生活線上の宗教』より)

中野 尅子(善英) 上人

## 捧げる

お百姓でも、お米を穫る、サツマを取る、あそこはミカンで何百貫取る、麦で何十俵取ると、取ることばかり云うが、自分が穫るつもりではないかぬ。

自分がお米を可愛がり、親切に手入れをして居れば、自然に稲の育ちがよく、実入りがよくて、収穫期に収量が多い。お米の稈りはお米にやらせるのだし、柿、蜜柑、養蚕、乳牛等でも、木や家畜を可愛がって居れば、彼等が自分で成績を上げて行く。都会でも月給取りが、月給を取るつもりになるが、月給を沢山取ろうとせぬでも、自分の職場に忠実で、研究的で、能力を上げて行けば、会社の成績も上って自然に自分のところへも収入が上って来る。月給を上げぬのは会社が悪い、時勢が悪い、政治

が悪い、台風が悪いと不平ばかり云って居て、自分自身も怠けて居るのでは、全体としての成績はいつまで経つても上らぬ。

「取る」ことばかりをあせらずに先づ与える事です。よきものを与える、除草し消毒し、水の加減をよくして稲の喜ようにしてやる。

養蚕なら、先づ蚕の喜ぶような部屋を造ってやる。蚕の喜ぶような旨味しい桑の葉を作って十分食わせる、すれば取繭も多い。

商売でも、物々交換の交易時代には「やり取り」と云うて、先づ良き物品を列べて、コレでソレを交換して呉れと望んだ、自分の方から「良きもの」を提供しなくては此の不況時代には一層自分が見捨てられ、自分から自分が窮地に陥る。平凡な事だが、先づ与える

こと、よきもの、よき親切、よき総力を捧げること……

弁栄上人も、信仰とは「如来のみ力とみ恵とによりて、生き働き有ることを得たる吾れば、吾身と心との総てを捧げて仕へ奉らん」と単的に言つて居られる、宗教に捧げる事です。

### 唐沢山眞生修養会参加者

唐沢山眞生修養会参加者

二〇一九年八月一日(木)

5日(月)

- |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |      |       |       |
|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|
| 東     | 青     | 東     | 東     | 東      | 東     | 東     | 東     | 東     | 東     | 東    | 東     | 東     |
| 京     | 森     | 京     | 京     | 京      | 京     | 京     | 京     | 京     | 京     | 京    | 京     | 京     |
| 土屋 正道 | 石田 孝信 | 大田 眞祐 | 野田 弘子 | 佐藤 利恵子 | 局 洋次郎 | 木村 吉裕 | 藤澤 裕子 | 服部 道子 | 高木 宏昌 | 大橋 舞 | 酒井 正空 | 埼玉 正空 |



光道上人名号石の前で



唐沢山修養会参加者と共に

## 唐沢山修養会に参加して

愛知 大橋 舞

今回、唐沢山修養会に初めて参加いたしました。名古屋市内の生まれの私にとっては、お山で過ごすことが初めての体験です。

タクシーの運転手さんが心配してくれのような細い坂道を、荷物を抱えて本堂まで上がっていくだけで息切れする始末で、頭上からかすかに聞こえてくるお念仏と木の音が頼り。

全日程5日間のうち、2泊3日のみの短い期間での参加でしたが、このようにして始まった

山での滞在の思い出はポラロイド写真のように、時間がたつにつれて、ゆっくり、かえって鮮やかに心に浮かび上がってまいります。

3日目の早朝のことです。お勤めの合間に外に出てみれば、日が昇ってあたりは輝かしい緑色。美しいなあと思う、ありがたいなとすら思った瞬間になんだか得体の

しれない不安をも覚えました。泣きたいような気持ちの正体を考えるに、あえて説明するなら「ことばが言語の形をしているとは限らない。」と知ったからだと思えます。気づけば、日の光、風の音、水の流れる音、木々の色づき、小鳥のさえずり、あらゆる自然が言語でないことばで私に話しかけているのです。例えば、「ここでは、すべてのことが絶えず動いていてとどまることはありません。」というようなことを。教えられること

の内容が大きくてすぐに受け止めるきれなかったのだらうと思います。一つの体験を例にあげるなら、湧き水は、絶えず湧き出し、流れ出ては再び大地に染み込んでいて、元には戻りません。その一瞬

にしかない水の一杯を今日、私が生かされるために飲み干したとき、まさに「いただく」という気持ち、水は私に取り込まれたのか、私が水の一部になったのか、「私」と思っている存在が曖昧になっていくよ

うな感覚、水一杯分も一人の力だけで生きられないという気づき、様々にこみあげて呆然としました。

一方、湧き水に口づけた瞬間に確かに耳に聞こえた「今しかないのよ。」という声は、私が毎月通っている京都の旧尼僧道場での集い

(仏教女性の集い)において近藤徹稱先生が常日頃からおっしゃっていることなのですが、先生のその言葉を山の中で初めて聞いたかのように胸打たれたのです。「本当に出会う」ということには、場所や時間を超えることもあるのだということもまた、湧き水に教え

られました。

自然は、お念仏を申す声は持ちません。持ちませんが、このように声なき声で、お釈迦様が説かれる真理・法則をそのままに教えてくれていると感じました。私が都会の生活に戻っても、何を忘れないで生活すればよいのかという智慧を伝えてくれています。また、

阿弥陀様のあまねく照らす光、慈

悲の願いの中に私があると、私にもわかる形で現わしてくれているように感じました。そのような意味で、仏のはたらきに沿っている、南無阿弥陀仏そのものという気持ちになりました。

本来、あらゆるすべてのものから私は教えを得、願われているのちを生かされている存在でありながら、それに気づけないで、勝手に思い煩う人間であるので、念仏申させていただく縁を用意いた

だいでいるのだとありがたいと感じます。申させていただくより他に

ない。

修養会では、都会に置いてきた仕事や日常生活から離され、お念仏とご法話中心の規則正しい生活、消灯・起床も一斉で、自分の時間というのはほとんどありませんし、交わす言葉は極端なことを申せば「南無阿弥陀仏」だけで事足りるシンプルな状況の中で、私の心はかえって、のびのびと自由になっていました。

多くの念仏者がこの山で過ごされた歴史があると伺います。今回ご一緒した参加者の中にも、「こ

こは心のふるさと。」「毎年ここに来ないと落ち着かなくて。」「私のお正月のようなものかも。」と話して下さる方々がありました。

た。ここでお念仏した大勢の人々の想いや気づきの記憶も山に染み込んでいます。冒頭に申したように、数人のお念仏の声と木魚の音がかりに坂道を上がついていった私ですが、帰りは山全体の南無阿弥陀仏の世界と、かつてここに集った念仏者たちの時空を超えた念仏の声に送り出されました。

期間中、ご指導いただきました、土屋先生、石田先生、酒井様、ご親切にしてくださいました参加者の皆様に感謝申し上げます。

銘々がおいとまの際にご本尊様に手を合わせられる姿、「また会いましょう。」と微笑まれる様は美しい光景でした。お念仏を申し

ていれば、またお会いできるご縁に恵まれるということをご存知のお別れの挨拶でした。

比叡山松禅院仲秋念仏大会

二〇一九年九月十五日(日)

〓十七日(火)

参加者

- |      |      |      |     |      |       |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |    |    |    |    |    |    |    |  |
|------|------|------|-----|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|----|----|----|----|----|----|----|--|
| 埼玉   | 東京   | 兵庫   | 三重  | 三重   | 大坂    | 滋賀   | 千葉   | 東京   | 東京   | 東京   | 東京   | 東京   | 東京   | 東京   | 神奈川  | 神奈川  | 東京 | 東京 | 東京 | 東京 | 大坂 | 東京 | 埼玉 |  |
| 酒井正空 | 諸澤正俊 | 濱田正勝 | 洪美珠 | 牧野容子 | 乗物美江子 | 積山法廣 | 春山啓子 | 石竹智子 | 大田眞祐 | 巻田和雄 | 中川英子 | 空地秀晃 | 前島格也 | 中野富夫 | 山岡和知 | 土屋正道 |    |    |    |    |    |    |    |  |



大願浄書後、仏塔に納匝



松禅院仏塔前で大念仏

眞生芳志感謝①

473号以降に会費納入くださった方々の前年度の眞生芳志録です。至心に感謝申し上げます。

◆金八万六七四円

愛知 戸田好子

◆金三万円

埼玉 十連寺・愛知 続木正歩

◆金二万円

三重 伊藤信夫・埼玉 灸原恒久

新潟 岡村明子・福岡 坂本一紀

愛知 洞泉寺・東京 栖岸院

◆金一万五千円

富山 金山雅子

◆金一万二千元

東京 高橋高幸

◆金一万元

兵庫 松永隆史・宮城 奥山清康

鳥取 工藤純裕・東京 吉田晶子

神奈川 吉川瑞浩・青森 鈴木信然

愛知 柴田梓・東京 教運寺

東京 八木千暁・新潟 平田理子

大阪 中村法道・岡山 鳴谷香洋

千葉 岡村浦亮・滋賀 溪 恒雄



東京 西念寺・神奈川 石黒 毅

愛媛 松樹俊雄・広島 野間 堯

愛媛 宮川真弓・東京 出口宣夫

長野 藤倉泰弘・宮城 昌繁寺

北海道 藤井乘亮・神奈川 金子寛哉

千葉 江口隆定・静岡 善龍寺

静岡 三好承治・埼玉 常相院

静岡 桑子文雄・東京 西城宗隆

埼玉 白川令子・東京 荒木良道

愛知 米山久美子・北海道 長専寺

神奈川 相馬宣正・茨城 本泉寺

岩手 円光寺・岡山 仁保健爾

新潟 原 久子・静岡 野上智徳

新潟 与口勝郎

神奈川 金井智子 恒雄

東京 林 真也・東京 梶村 昇

東京 奥村京子・長野 宮林正樹

千葉 北島通子・福岡 山本秀信

愛媛 財津永記・東京 吉岡典子

滋賀 広瀬卓爾・福岡 横溝瑠璃

神奈川 豊福久代

長野 古田幸隆・佐賀 田代祐照

◆金八千円

岡山 漆間宣隆 典子

◆金五千円

兵庫 日下部謙旨・東京 浜田誠実

千葉 大信田洋子・兵庫 高橋弘次

京都 金剛寺・東京 平野能子

東京 長善寺・埼玉 田口忠男

千葉 林 由利子・青森 大屋俊考

三重 山際久美・三重 伊藤照光

神奈川 鈴木尚子・愛媛 高橋宏文

東京 佐藤利恵子・埼玉 小島美江子

栃木 今井俊宏・長野 海野徹也

千葉 服部道子・千葉 江草喜美子

埼玉 蘇田三千穂・愛知 石川乘願

千葉 成富世枝子

◆金四千円

愛知 高木宏昌

神奈川 豊福久代・真理

◆金三千円

神奈川 小田切けさよ・東京 川原 均

富山 横川喜一・埼玉 桑名尋子

神奈川 斎藤啓太郎・長崎 早田明生

東京 遠藤幸子

◆金二千円

東京 石竹智子・静岡 寶相寺

東京 島田喜久子・高知 杉山和子

新潟 村田弘文・千葉 桜井昌彦

愛知 鈴木房江・静岡 高田幸男

長野 櫻井好一・千葉 久我光雲

神奈川 大橋俊史・東京 高橋克子

千葉 郡嶋泰成・長野 恭儉寺

千葉 大澤陽二・東京 加藤悦子

新潟 小嶋知紀・兵庫 早川省二

京都 羽田龍也・神奈川 松林智久

東京 森 強・京都 長澤博子

滋賀 中川英子・岩手 下 弘明

東京 小島 清一・静岡 久保田修司

東京 堀 タイ子・埼玉 榎川 隆

東京 藤澤裕子・神奈川 天沼寛文

群馬 山岡良子

◆金千円

埼玉 八木アヤ子

### 眞生芳志感謝②

(敬称略)

本年四月号で道友の皆様にご会費

納入のお願いをしましたところ、

多くの方々が会費を納入してくだ

さいました。至心に感謝申し上げ

ます。

◆金六万円

新潟 原 久子

◆金三万円

兵庫 山口芳典

◆金二万円

千葉 服部道子・静岡 願成寺

東京 光円寺・北海道 高橋宗憲

埼玉 小島美江子(他二名)

◆金一万三千円

滋賀 阿弥陀寺

◆金一万五千円

兵庫 山岡和知

◆金二万円

大阪 森島米史郎・兵庫 宝地院

東京 多賀谷崇繁・群馬 眞木興空

茨城 田中勝道・千葉 江口隆定

群馬 稲村博道・東京 福田行慈

鳥取 工藤純裕・長野 笠井宗近

茨城 本泉寺・東京 奥村京子

埼玉 齋藤隆雄・福岡 永江憲昭

神奈川 局洋次郎・東京 渡邊眞宏

大阪 有本亮啓・山梨 称念寺

静岡 瀧沢廣運・東京 稲田正新

東京 後藤眞法・東京 長谷川岱潤

東京 勝楽寺・東京 岡本幸宗

東京 田村美佐子・青森 石田孝信

大阪 中村法道・大分 菅野浄光

東京 栄立院・大分 麻生信子  
 東京 黒田俊広・秋田 加澤昌人  
 東京 西城宗隆・佐賀 大法寺  
 大分 法然寺・茨城 得生寺  
 千葉 光岳寺・青森 莊嚴寺  
 神奈川 吉川瑞浩・東京 嘉藤哲也  
 埼玉 石田祐寛・青森 長尾拓應  
 埼玉 町田唯真・東京 佐藤敏郎  
 福岡 安永宏史・富山 小林照人  
 滋賀 法蔵寺  
 宮城 水間 豊・昭子  
 茨城 無量寿寺・新潟 与口勝郎  
 茨城 板倉信夫・宮城 昌繁寺  
 神奈川 里見嘉嗣・千葉 関野紘一  
 神奈川 圓満寺・東京 八木千暁  
 東京 心行院・神奈川 戸松秀明  
 東京 宮木美知子・千葉 松平寛隆  
 神奈川 相馬亘正・神奈川 中村春美

◆金五千円  
 千葉 大信田洋子・東京 戸田政江  
 東京 原口弘之・東京 長善寺  
 埼玉 八木アヤ子・長崎 日下部匡信  
 埼玉 白川令子・兵庫 高橋弘次  
 東京 広田恵子・京都 羽田龍也  
 神奈川 鈴木尚子・神奈川 林サト  
 千葉 野島保夫・新潟 桑山智恵  
 神奈川 青木章子・愛知 柴田 梓  
 千葉 佐藤晴輝・佐賀 田中良道  
 愛知 矢野司空・富山 田村玲香  
 神奈川 城所和代・千葉 江島靖喜  
 滋賀 三輪晃照・千葉 巻田和男  
 兵庫 泉有彦・兵庫 天野遊亀子  
 ◆金四千円  
 長野 古田幸隆・東京 石竹智子  
 千葉 桜井昌彦  
 ◆金三千円  
 岐阜 早川修二・東京 西野好子  
 千葉 為谷豊子・長野 恭儉寺  
 東京 佐川久美子・東京 平野能子  
 東京 植木勉・神奈川 斎藤啓太郎  
 福岡 國武香隆・千葉 大澤陽二  
 滋賀 宝国寺

◆金二千円  
 東京 佐藤冬樹・京都 岸名優里哉  
 富山 坂井俊三・長野 北川正明  
 青森 三浦幸子・東京 廣田耕子  
 宮城 西方寺・愛知 水谷浩志  
 愛媛 大林寺・神奈川 川野誠  
 東京 荒井寿雄・東京 岩崎朋和  
 神奈川 西福寺・長野 櫻井好一  
 和歌山 山崎綾子・東京 中村一子  
 茨城 浄国寺・東京 金蔵寺  
 東京 春山啓子  
 静岡 高田幸男・都子  
 千葉 久我光雲・長野 白蓮坊  
 千葉 長谷川克也・福島 蓮沼一紀  
 新潟 小嶋知紀・東京 上田密記子  
 愛知 高木宏昌・東京 木村吉裕  
 東京 大田眞祐・三重 山際久美  
 沖繩 石黒君子・埼玉 蓮光寺  
 福岡 横溝瑠璃・埼玉 山口江里  
 ◆金一千円  
 東京 北野昌子・愛知 祖父江良臣  
 (敬称略)

## お見舞い

聖名

台風15号、19号をはじめとする  
 大雨大風により御隠れになられま  
 した方々のご冥福をお祈りすると  
 ともに、被災されました多くの  
 方々に心よりお見舞い申し上げます。  
 一刻も早い復興を祈念いたし  
 ます。眞生同盟も義援金・災害ボ  
 ランティア等支援策を図ってまい  
 ります。 合掌  
 天災地変横難殃死の諸精霊位拔苦  
 与楽超生浄土、並びに水害風害被  
 災者身心安穩生活安寧地域復興祈  
 願し奉る 南無阿弥陀仏

## 念仏フェスティバル厳修

浄土宗七祖了誉聖阿上人六百回忌  
 大本山増上寺十二世中興普光観智  
 国師源誉存心上人四百回忌  
 光明主義始祖仏陀禅那弁栄上人  
 百回忌 普賢行願究竟円満莊嚴浄  
 土報恩謝徳 増上寺にて十日十夜  
 の念仏会を円成しました。